

ガンス法、あるいは白鳥と鷺鳥の物語

堅 田 剛

白鳥と呼ばれる紳士がいた。貴族の家に生まれ王子に愛された。

鷺鳥^{ガンズ}という名のユダヤ人がいた。青年たちに共和政治の夢を与えた。

白鳥は鷺鳥に法を贈った。鷺鳥を池に入れないためだった。

王子が言った。白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない、と。

一 ガンスの町

軍人と商人の町に大学ができて、十九世紀初頭のベルリンは一躍ドイツの学術と文化の中心地となる。プロイセン王国の首都ベルリンを軍人と商人の町と蔑んだのはイエナのロマン派であつたけれど、なるほどフリードリヒ大王による富国強兵策以来、ベルリンには軍人と商人があふれてみえたかもしれない。だが皮肉にも、文化的なイエ

ナの町がナポレオンの軍隊に占拠されるや、多くの文人はベルリンに逃れ、それがこの地に大学を設立するきっかけになった。大学の創始者は人文主義的政治家のヴィルヘルム・フンボルトと哲学者のフイヒテであったが、やがてベルリン大学は法学部のサヴィニーと哲学部のヘーゲルを二枚看板として全ドイツの学界に君臨することになる。

ベルリンには多くのユダヤ商人が住み、彼らの子弟のなかにはこの町の大学で勉学を志す者たちも現われた。ガンス (Gans=鷺鳥) 家は、代々宮廷代理人を勤めており、ベルリンのユダヤ商人のなかでは屈指の家柄に属する。エドゥアルト・ガンス (Eduard Gans) は銀行家の、つまりは金貸しのアブラハム・ガンスの長男として、一七九七年三月二三日にこの町で生まれた。ベルリンとゲッティンゲンで法学を学んだのち、ハイデルベルクで学位を取り、ふたたびベルリンに戻ってきた。一八一九年のことである。

青年時代のガンスについて紹介するとき、ベルリンで結成されたユダヤ人文化学術協会を抜きにすることはできない。ライスナーの『エドゥアルト・ガンス——三月前期の生涯——』によれば、同協会は一八二一年の三月までに規約を整えて正式に発足した。その過程で最終目的も、当初の「ドイツ連邦諸国に住むユダヤ人の地位改善」から、「内発的な教養形成をつうじて、ユダヤ人を彼らが生活する時代や国家と融和させること」に変えられた。政治的解放というよりは、「文化的同化」(Akkulturation)をめざしたということである。長期的な計画としては、学校・研究所・大学の設立とともに、文筆業や公職への就職促進を掲げていたが、当面の綱領には次の四点を挙げている。すなわち、①研究会の設立、②機関誌の発行、③学校の設立、④情報交換のための文書館の構想、である⁽¹⁾。

ベルリンを中心としたユダヤ人青年たちの文化運動は、その組織も名称も定まらないままに、ガンスが戻った一八一九年から活動を開始した。二一年三月には規約も整い、同時にガンスが会長に選出され、このことによって活

動は飛躍的に発展した。これ以降二五年四月の解散まで、ガンスは名実ともに協会の指導者でありつづける。他の主だった会員としては、レオポルト・ツント、モーゼス・モーザー、ルートヴィヒ・マルクスなどがいた。彼らはガンスと同じく二十代の大学教育を受けた青年たちであったが、ガンスのあまりの卓抜性のゆえか、後継者はついに現われなかった。そもそも「ユダヤ人文化学術協会」(Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden)という組織の名称そのものが、ほかならぬガンスの提案によるものであった。その際ガンス自身は、あまりにも広範な「文化」運動よりは、「学術」研究のほうに軸足を置いたのであるが。⁽²⁾

さて協会の具体的な活動であるけれども、先に挙げた四つの短期的綱領の実際について簡単に言及しておこう。まず①の研究会は、実質三年ほどのあいだに五十回以上開催されている。大学の休業期間を除けば月二回以上の頻度であるから、活発な研究会であったとしてもいい。だが内実をみれば、研究報告は五、六人の幹部会員が交代でおこなったにすぎず、そのなかでもガンスの報告回数が圧倒的に多かった。また研究会での報告は、②の機関誌である『ユダヤ学雑誌』に掲載された。この雑誌はわずか三号で終わったが、ここに収載された全部で十六編の論文のうち四編がガンスのものであった。⁽³⁾ 研究会も機関誌も、ガンスの研究発表の媒体たる性格を有していたとせねばならない。

さらに③の学校であるが、これはユダヤ人の留学生を対象に、ベルリン大学への入学準備のために、ドイツ語文法や古典語をはじめとした基礎教育をおこなう組織として開校した。生徒数は累計で二二名であるから、学校というより私塾といったほうが実態に近い。授業は協会員が分担し、ガンスも古典語やローマ史を教えた。そして④の文書館であるけれども、これは先の学校と同様に特別の建物が造られたわけではなく、新聞の切り抜きや手紙のやり取りをつうじて、ドイツ内外のユダヤ人の情報交換活動として実現した。その過程で集まった文書は、これもま

た会長のガンスの手元に置かれたのであった。⁽⁴⁾

ユダヤ人文化芸術協会は、すべてがガンスを中心に運営された。協会の長期的展望はともかく、少なくとも短期的綱領については、ガンスの卓越した指導力によって着実に実行に移されたのであった。ところが、理想が現実化することなく、夢想のままで終わった第五の計画がある。仲間うちで「ガンス・タウン」(Gansown)、つまりガンスの町と呼ばれたユートピア建設の夢である。

この直接のきっかけは二つあった。いずれもアメリカからのユダヤ人入植の呼びかけで、同じ一八一九年に時を前後して協会員たちの知るところとなった。

そのうちの一つは、ウィリアム・デイヴィス・ロビンソンというキリスト教徒のアメリカ商人による入植勧誘であった。これは『在欧ユダヤ教徒への覚書、北米合衆国の最適地への移民および入植について』と題され、ロンドンで刊行された小冊子である。ロビンソンによる次のような呼びかけは、ヨーロッパで日の当たらない多くのユダヤ人にとって、きわめて魅力的な誘いに映ったにちがいない。「私たちは、ユダヤ人の農地がアメリカの森に広がり、ユダヤ人の町や村がミシシッピ川やミズーリ川の岸辺を飾るのを見ることになるでしょう。そして芸術や商業や工業が、合衆国の他のすべての農業地域で例証されたのと同様の速さで、この新しい入植地においても発展することでしょう。」⁽⁵⁾

二つ目は、ニュー・ヨーク在住のユダヤ人モデルカイ・マニユエル・ノアからの、協会に対する直接の呼びかけであった。いわば現代版の「ノアの方舟」計画である。実際この入植地は新エルサレムとか、方舟の停泊した山にちなんでアラトと名づけられていた。もっとも、この呼びかけが協会の正式な議題となったのは、一八二一年の年末になってからだった。ライスナーは同年十二月二十九日の協会会議議事録にもとづいて、出席者の発言を逐一紹

介しているが、ここではガンスの立場を確認するのに必要な範囲に留めておく。⁽⁶⁾

ノアの呼びかけを会議に諮ったのは、入会したばかりのエリーザ・キルシュバウムであった。彼は二万モルゲンの島に三千から六千の家族、つまり少なくとも三万五千人のユダヤ人を入植させる、という提案をおこなった。農民を主体に、手工業者や商人も住む一大コロニーをアメリカに作ろうというのである。三万五千人という具体的な人口は、ロビンソン覚書にもとづくもので、合衆国大統領を選出するための選挙人指名の最低要件とされた。これがロビンソンの誤解であったことはともかく、キルシュバウムのいうコロニーとは、アメリカ合衆国のなかにユダヤ人だけの独立した「州国家」(State, Staat)を建設するという壮大な計画にはかならなかった。

これに対する会長ガンスの対応は、いかにも法学者らしい、きわめて形式的なものであった。すなわち、アメリカ入植を協会の事業とするためには、規約を拡張解釈して「情報交換のための文書館」(Archiv für die Korrespondenz)の範疇に入るかどうかの検討が先決だ、というのである。この一見的外れな発言も、ノアとのあいだでさしあたり入植計画の詳細な情報をやり取りする趣旨と読めば、理解できないことはない。だがそれにしても、ユダヤ人国家の建設までを視野に入れたキルシュバウム提案にくらべれば、ガンスの姿勢がいかに及び腰であることは否定できないだろう。⁽⁷⁾

ガンスは文化的同化の方針と矛盾するからか、入植計画に必ずしも積極的ではなかった。にもかかわらず、ノアやキルシュバウムが夢見た入植地は「ガンス・タウン」と呼ばれた。こう呼んだのはハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797—1856) である。紹介が遅れたが、ハイネもまたベルリン滞在時に協会に入会した。そのきっかけとなったガンスとハイネの出会いについて、ライスナーは次のように述べている。一八二二年七月のことである。

「ハイネは、一八二一年の夏学期から一八二二／二三年の冬学期まで、ベルリン大学で学んだ。一八二一／二二年の冬学期には、彼はヘーゲルの美学講義を聴講し、そこでヨーゼフ・レーマンと知り合った。この彼がハイネを、レーマンの未来の舅フィリップ・ファイトの家に案内した。ファイトのサロンでの伝統的な『土曜の夕べ』において、ハイネは、ガンズ、モーザー、ツンツなどにはじめて出会った。ガンズはハイネに注目して、彼——ガンズ——とその他の何人かで共同で、ベルリン発の法学・国家学の批評誌を発行することを提案した。そのためには当地では『かなりの不足』があるから、というのである。ガンズの計画は尚早だったが、しかし四年後にはより成熟したかたちで、コッタ男爵とヘーゲルの積極的な協力のもとにそれは実現した。⁽⁸⁾」

ガンズの本質が学者でありハイネが詩人であったこと、ガンズが早死にしハイネが長く生きすぎたことを除けば、この二人は双生児といっても良いほどに多くの共通点をもっている。彼らがユダヤ人であることは今さら指摘するまでもないが、ともに都会の銀行家の家系に生まれ、しかも同い年であり、ともに法学を学び、そのゆえにサヴィニー嫌いとなり、その反動でヘーゲル哲学に接近し、フランスの共和政治に憧れ、こうして青年マルクスに強烈な刺激を与えた。ガンズとハイネはたがいに影のような存在であった。ハイネの詩的表現はしばしばガンズの学者的部分に向けられたけれども、それはたいいていの場合、ハイネの自己嫌悪や自己批判をともなっていた。⁽⁹⁾

このハイネがモーザーにあてた手紙のなかで、「いつかガンズ・タウンが建設され、……新しいユダヤ文学が花咲くとき……」と述べている。⁽¹⁰⁾ いともならこれをガンズへの皮肉として読むところだが、この手紙に関するかぎり、ハイネは本気で〈ガンズ・タウン〉の実現を望んでいたようにみえる。ユダヤ人文化学術協会に入会し、入植計画を知ること、ハイネはようやくユダヤ詩人としての自己に目覚めたかのようなのである。

ところが「ガンス・タウン」の計画は、一八二二年一月二〇日の研究会において事実上の凍結扱いとされてしまふ。この日キルシュバウムは自説を繰り返したうえで、さらに宗教的熱狂をもって最後にこう付け加えた。「あらゆる賛美をも超越した敬愛する人物を称えよう。メリーランド州の優秀な学者ノア氏を称えよう。氏はすでに同州に大きな島を購入した。ユダヤ人をそこに移住させるために。」

ライスナーはこの最後の訴えを、キルシュバウムの「白鳥の歌」(Schwanengesang)と解説している。瀕死の白鳥の臨終の歌というわけだが、それはキルシュバウムにのみ帰すべきではない。「ガンス・タウン」はユダヤ人文化芸術協会の、ある意味で最も実践的な目標であったのだから。それにしても、ノア(Noah)ノアの方舟)、キルシュバウム(Kirschbaum)サクラの木)、ガンス(Gans)鷺鳥)、白鳥とつづくと、「ガンス・タウン」の物語はいかにも寓話めいてくる。それは本当にあった物語なのだろうか。あるいはユダヤの青年たちの白日夢にすぎなかったのだろうか。

協会が解散したあと、ハイネはハンブルクからモーザーに手紙を送った。日付は「一八二六年ガンス月二三日」(den 23. des Monats Gans 1826)とある。「私はしばしば夜中に起きて鏡の前に立ち、自分を罵ります、たぶんそのとき私は鏡の中に友人の魂を見ているのです。……ああ、天気の変わりやすい、首尾の一貫しない四月よ、許したまえ、私が君に不正をおこない、君をガンス博士と一緒にしたことを。……私は、ガンスとマルドカイ・ノアがシュトラールアウで出会った夢を見ました。ガンスは、ああ驚いたことに！、魚のように黙っていました。……」⁽¹⁾

ハイネの鏡に映った友人とは、ガンス博士であった。ハイネはガンスの変わり身の早さ、首尾一貫性のなさを、不順な気候の四月になぞらえて「ガンス月」と命名した。シュトラールアウはベルリン郊外の水郷であるが、ハイネはそこでガンスとノアが出会った夢を見たという。ハイネは実は、「ガンス・タウン」の挫折について、ガンス本

人を非難しているのである。もっとも、鏡の中にはガンスと二重映しになったハイネ自身がいるのだが。

ハイネはベルリンを立ち去った。だがガンスはベルリンに留まる。そこは彼が生まれ育った所で、本当の「ガンスの町」であつたからだ。そこには、サヴィニーとヘーゲルが教える大学があつた。

二 ガンスの法

ユダヤ人文化学術協会の活動が最も盛んであつたのは、一八二一年三月から二三年四月までのわずか二年あまりの期間にすぎない。その後も協会は存続したが、二四年一月の総会以来、会議が開かれることもなくなった。次に掲げるのは、会長ガンス自身による協会への訣別宣言である。

「私は協会は事実上解消したものと思いますので、私の会長職も終了したものと思います。もし別の御意見をお持ちでしたら、次期会長として、貴兄に属すべき主宰権を引き継がれても結構です。お元気で。

ベルリン、一八二五年四月二〇日

ガンス博士

ユダヤ人文化学術協会 会長 ツンツ博士机⁽¹²⁾下」

協会が儚く挫折してしまつたのは、それがしよせんは学生の運動にすぎなかったからだ。彼らの思想が観念的であつたとか、一般のユダヤ人社会から浮き上がつていたということは、あらためて指摘するまでもない。彼らもい

つまでも学生でありつづけるわけにいなかった、ということだ。ユダヤ人文化学術協会の方針は文化的同化であった。そしてそれは、キリスト教社会の内部に積極的に入り込み、そこで相応の職を求めることを意味していた。

ユダヤ人の社会的地位というとき、当時の情況はヨーロッパ全体をみてもドイツ全土をみても大差はなかったろうが、ここではベルリンを首都とするプロイセン王国に視点を限って眺めておく。この王国では、いわゆるシュタイン＝ハルデンベルクの改革の副産物として、一八一二年三月に、「プロイセン国家におけるユダヤ人の市民的地位に関する勅令」が發布された。この趣旨はユダヤ人に市民的権利を与えるというもので、彼らが市民社会から完全に疎外されていた歴史を顧みれば、ともかくも画期的な勅令であったことは認めねばならない。⁽¹³⁾ しばしば「解放勅令」とも称されるゆえんである。

解放勅令は、第一条で在住ユダヤ人にプロイセン国籍を認定し、第七条でキリスト教徒と同等の市民権を承認した。しかも第八条では、ユダヤ人も学校職員や地方公務員、さらには大学の教職に就く資格があるとされていた。ところが、直後の第九条には、国家公務員になるには当局の許可が必要である旨が記されていたのである。まさにヨハン・ブラウンがそのガンス研究書のなかで指摘するように、ユダヤ人は法学部の教授にはなれるが、司法官にも行政官にもなれない、という矛盾の生じる余地があった。法学部の主たる任務が、司法官や行政官の養成にあつたにもかかわらずである。⁽¹⁴⁾

それはともかく、ではユダヤ人が本当に大学教員になったのかといえ、実はそうではない。なによりもガンスの例が、そのきわめて困難な道を示すことになる。その発端を同じくブラウンの著書から引用しておこう。『ユダヤ教・法学・哲学——法学者エドゥアルト・ガンス（一七九七—一八三九）の肖像——』には、次のきわめて興味

深い一節がみられる。

「もとより、ガンスがベルリンに戻ってきた一八一九年には、そのような経緯について何事も述べられてはいなかった。彼は折りしも最初の法学書を出したところで、プロイセンの文化大臣アルテンシュタインにも一冊を献呈する機会をうかがっていた。その添え状の中で目立つのは、彼が『大学教員という天職』のために準備してきた、ということであった。つづいて彼は請願にとつて重要な斡旋者を見出した。すなわち、宰相みずからが彼のために尽力してくれ、アルテンシュタインに対して、ガンスを私講師としてプレスラウに派遣し、当地で『可及的速やかに員外教授に昇進させる』ことを勧めてくれている、というのである。同封されていたのは、ティボーの好意的な推薦書であつた⁽¹⁵⁾」

ガンスの学生生活はベルリンで始まりハイデルベルクで終わった。彼は法学をベルリン大学のサヴィニーと、ハイデルベルクのティボーのもとで学んだのである。ガンスがハイデルベルクに移ったのは、そこはベルリンとは異なつて、ユダヤ人でも学位を取ることができたからであつた。⁽¹⁶⁾ 彼は一八一九年、ティボーのもとで最優秀の成績で学位を取得した。そのときの論文が『ローマ債務法論』で、これはただちに印刷に付された。ガンスの最初の著書である。彼はこれを携えてベルリンに戻り、就職活動を開始した。その時期は、ユダヤ人文化学術協会の活動期間とびつたり重なっている。

先の引用個所に、ガンスは著書をアルテンシュタインに贈つたとある。これと前後して彼はもう一冊をサヴィニーに贈つて、面会を求めている。⁽¹⁷⁾ いうまでもなく、ベルリン大学の法学部に職を得るためである。だがサヴィ

ニーは会わなかった。サヴィニーのユダヤ人嫌いは別として、ほかにも理由は考えられる。というのも、彼からみれば、ガンスはティボーの弟子であるが、ティボーとサヴィニーとは一八一四年の法典論争以来、法学の方法をめぐって論敵の關係にあった。それだけではない。一八一八年、ガンスと入れ替わるようにしてヘーゲルがベルリン大学に招かれたが、ヘーゲルは前任地のハイデルベルクにおいてティボーと親しくなっていた。ヘーゲルは哲学部の教授であるけれども、その法哲学はサヴィニー歴史法学の根本的批判を含んでいた。つまり、サヴィニーはかつての教え子であったガンスの背後に、ティボーの法学とヘーゲルの哲学の臭いを早くも嗅ぎとっていたのではなかったか。

アルテンシュタインはガンスの就職希望を、ベルリン大学法学部の審査に委ねた。つまりはサヴィニーの判断に任せたということである。ところがガンスにとって不幸なことに、サヴィニーはかねてよりユダヤ人の解放政策には断固として反対していた。ブラウンも指摘するように、サヴィニーはみずから主宰する『歴史法学雑誌』において、ユダヤ人の法的平等化は政治的混乱を惹き起こすと述べたことさえあった。⁽¹⁸⁾案の定、サヴィニーが代表する法学部の見解は冷ややかなものであった。その結論部分にはこうある。「有名なユダヤ一門に属するガンス博士が個人的にはキリスト教に改宗しているのか、したがってこの観点から彼の公的な任用にはもはや支障がなくなったのか、このことについて我々は承知しておりません。」⁽¹⁹⁾ユダヤ教徒であるかぎり、法学部はガンスを受け入れないという姿勢を示したのである。

ガンス拒絶の法学部見解が出たのは、一八二〇年四月のことである。当の学部には撥ねつけられた以上、通常なら黙って退きざるしかないだろう。だがガンスはこの程度では諦めなかった。むしろここから彼の猛烈な就職運動が本格化するのである。

翌五月、ガンスはふたたびアルテンシュタインに手紙を書いて、ユダヤ人は「教育がないために嫌悪され、教育を受けたために迫害されるのです」と訴えて、もはやガンス個人の問題ではなくユダヤ人全体の問題として争う構えをみせた。手紙に同封された覚書はむしろ論文と呼ぶべきもので、「ユダヤ人問題」について「あらゆる側面から」差別の歴史を詳細に論じている。これは印刷に付されることこそなかったが、カール・マルクスの『ユダヤ人問題によせて』に先立つ画期的な論稿であった。

ときのプロイセン宰相はハルデンベルクである。文相アルテンシュタインが否定的であったのに対して、ハルデンベルクは終始ガンスの就職運動を側面から支援した。その理由はよくわからない。ハルデンベルクが人道主義者であったことを素直に信じるべきかもしれないし、自分が制定を促進した解放勅令に忠実であっただけかもしれない。だがどうやら彼はガンス家に負い目があったらしいのだ。ガンスの父親アブラハムがベルリンきつての銀行家であったことはすでに触れたが、対ナポレオン戦争の折り、プロイセンはアブラハムから莫大な軍用金を調達した。ガンス家のこうした貢献を、ハルデンベルクは思い出したのではなからうか。それはベルリンでは周知のことであった。法学部の所見には「有名なユダヤ一門に属するガンス博士」とある。学問の府としては、なおさら金貨しのガンスに反発を覚えたはずである。

宰相と文化大臣のあいだで折り合いがつかなければ、いよいよ国王に出馬を願うしかない。国王の裁定を仰ぐという法学部の意向をも受けて、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世はついに以下のような裁定を下した。

「宰相フォン・ハルデンベルク侯爵へ

今月四日付の貴報告を再検討した結果、一八二二年三月十一日の勅令第七条および第八条の規定は、これによれば本国人とみなしうるユダヤ人は、その能力に応じて大学教授職または学校教育職に就くことが許されるべきものであるが、この規定は重大な不調和を惹起せずには施行しえない、と余は看取した。ゆえに余はこの規定を破棄し、当該法規の改正を公示するためにしかるべき処置を貴官に委ねたい。したがって、エドゥアルト・ガンス博士の法学員外教授への任用はありえない。なぜなら、当局の判断によれば、彼はいまだ適格ではないからである。

テプリッツ、一八二二年八月十八日

フリードリヒ・ヴィルヘルム⁽²⁾
「フリードリヒ・ヴィルヘルム」

フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は、一八二二年の解放勅令をみずからの手で撤回した。「重大な不調和」が直接意味するのは閣内の不一致であろうが、さらに法学部の反対を念頭に置いたものであることは容易に想像できる。学部自治は守られた。しかしユダヤ人の期待は反古にされた。もともと、法学部の実体がサヴィニーであり、期待を裏切られたユダヤ人がガンスであることをみれば、この問題は一般論で片づけないほうがいいのかもしれない。国王の裁定は、エドゥアルト・ガンス博士をベルリン大学法学部に任用しない、と名指しで宣言したのである。

一八二二年の国王裁定は、法的効力を疑われるようなまことに変則的な勅令 (Kabinettsordre) であった。これ以降、この勅令は〈ガンス法〉(Lex Gans) と呼ばれるようになった。⁽²⁾ 十年前の解放勅令は、ほかならぬガンスを大学に入れないただけに破棄された。もともと、〈ガンス法〉なる名前を誰が言い出したのかはわからない。だが唐突

ではあるが、ここでユダヤ人文化学術協会のことを想起しておきたい。会長のガンスは、一八一九年以来、自身の就職運動と入植計画という相反することを、まったく同時に並行して進めていた。だとすれば、アメリカ入植計画を「ガンス・タウン」と名づけたのと同じ人物が、ガンスの就職を挫折させた勅令を「ガンス法」と命名したとしても不思議はない。その名付け親はおそらくハイネである。実際ハイネは協会の仲間への手紙で、「破棄された勅令の打撃」を打ち明けている。⁽²³⁾ 国王の裁定によってショックを受けたのはガンスだけではなく、ハイネにしても同様であった。「ガンス法」なる言い方のなかには、一方で植民計画を立てながら文化的同化を目指したユダヤ人青年たち、なかならずガンスとハイネの、自己嫌悪にも似た感情が含まれているように思える。自己嫌悪といってしまつたが、その説明はもう少しあとにまわしたい。

妙なことをいうようだが、「ガンス法」について、ガンスが国王の朝令暮改を恨みに思つた気配はない。また宰相ハルデンベルクや文化大臣アルテンシュタインを恨むこともなかった。ガンスは同時代の誰もが認めるように強烈な個性をもった人物であつたから、この礼儀正しさはいかにも氣にかかるところではある。ところが、ガンスは就職の失敗についての恨みつらみを、ただ一点サヴィニーに向けている。ガンスからすれば、そもそもサヴィニーこそが彼を排斥した張本人であつた。サヴィニーが反対しさえしなければ、「ガンス法」問題など生じえなかつたのではないか。こうした見方は皮相にすぎるかもしれないけれども、このときの感情的しこりを前提にしなければ、のちに華々しく展開されたガンスとサヴィニーの論争を理解することはできない。それはけつして学問的な争いではなく、きわめて人間的な泥仕合であつたからだ。「ガンス法」の陰の主役は、実はサヴィニーであつた。この意味で、「ガンス法」は「サヴィニー法」でもあつたのである。

フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニー (Friedrich Carl von Savigny, 1779—1861) についてはこれまで小

出しにしてきたけれど、このへんで彼の人物像を抽出してみよう。それもありきたりのものではない。ハイネの目に映ったサヴィニーである。ガンス同様ハイネも法学の徒であり、ベルリンでユダヤ人化学術協会に関わったことはすでに述べた。彼は詩作と協会活動のかたわら、駆け出しのジャーナリストとして、故郷の新聞のために「ベルリン便り」を連載している。そのなかに大法学者サヴィニーの紹介がある。日付は一八二二年三月、例の国王裁定が出る数ヶ月前である。

「その人物は黒い髪を肩にかかるほどに垂らし、敬虔な愛のまなざしで天を仰ぐさまは、キリストの像にも似ており、おまけにフランスの出自なのでフランスの名前をもっているのですが、でもまったくドイツ的に権力をふるいます。もし私がこの北ドイツの偉大なる法学者について語るとしたら、皆さんは僕が誰のことを考えているかに気づくことでしょう。⁽²⁴⁾」

この法学者が誰であるか、ハイネはここで名前を明かしていない。しかし、フランスの名前をもちドイツ的に権力をふるうといえ、読者はそれがサヴィニーであることを理解したのである。歴史法学の創立者サヴィニーは、すでにベルリンのみならず全ドイツに名を馳せていた。もっとも、ハイネがこの時事的評論のなかで「権力をふるう」(gewaltig tun)というとき、それはもっと特別の意味をもっていたはずである。すなわち、ガンスの任用を権力をもって拒絶したという、かなり知れ渡った事件を仄めかしているのではないか。ユダヤ教徒のガンスを迫害するサヴィニーは、だからこそキリストになぞらえられるのだ。「ベルリン便り」のこの個所は、同志ガンスへの援護射撃であった。実はこの便りのあとのほうで、ハイネは種明かしをするかのようにサヴィニーの名前を出してい

る。「フォン・サヴィニー氏は、この夏学期に法学提要を講義します」というわずか一行の文章である。⁽²⁵⁾ いかにも世事に疎い読者でも、ここまで読めば先ほどの人物が誰であるかに気づく仕組みなのである。

さてガンズに話を戻そう。国王の裁定が下った以上、ガンズの任用問題は決着が付いたと誰もが思う。ところが、事態は劇的に逆転した。その顛末を簡単にみておこう。

ガンズは一八二三年の十月に、『世界史的発展における相続法』の第一巻を出版した。これはもとより相続法の研究であるが、その手法はヘーゲルの歴史哲学を法学に応用する壮大な試みであった。これがアルテンシュタインの心証を良くした。というのも、彼はサヴィニーよりはヘーゲルのほうと懇意であったからだ。アルテンシュタインは今度は国王に対して、ガンズの才能を褒め称えた。またハルデンベルクの推薦により、ガンズには一八二四年より年額五百ターラーの奨学金が支給されることになった。国王と宰相と文化大臣がガンズを再評価したのである。こうしてガンズは研究旅行に旅立った。風向きはガンズに有利に変化しはじめた。

決定的であったのは、研究旅行の途上、一八二五年十二月十二日にガンズがパリで洗礼を受けたことである。彼はユダヤ教からキリスト教に改宗した。研究旅行というのは名目で、最初から改宗が目的の旅だったのかもしれない。ユダヤ人というのはユダヤ教徒のことであるから、彼らがキリスト教に改宗すればもうユダヤ人ではなくなる。ガンズの場合もそうであり、改宗することで障壁は完全に取り払われた。ブラウンはこう述べている。「一八二六年一月、ガンズは福音派のキリスト教徒としてベルリンに戻ってきた。二ヵ月後には彼はもう員外教授になっていた。⁽²⁶⁾」

三 白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない

ガンスはユダヤ人文化学会の会長を辞めて、そうして改宗の旅に出た。彼は仲間を裏切って、それと引き替えにヨーロッパ的生活への入場券を手に入れたのである。ガンスは背教者となった。ハイネはガンスの裏切りを非難して次のような三連詩を作った。

「ああ聖なる青年の気分を！

ああ、いかにも早く君は押さえ込んだね！

そして君は、冷やかに、

愛する主と意思を通じた。

そして君は十字架に這いつくばる、

見下したはずの十字架に、

それはほんの数週間前まで

蔑ろにしていたものだ！

ああ、君は本を読みすぎた

シュレーゲルやハラーやバークのものを――

昨日はまだ英雄だったのに、

今日はもう裏切り者だなんて。⁽²⁷⁾

ハイネは、ユダヤ人文化学術協会の同志モーザーにあてて、プロイセンの官職に就くためにキリスト教の洗礼を受けるのは下品で不名誉なことだ、と書いたことがある。明らかにガンスのことを念頭に置いて、キリスト教に改宗しさえすれば就職できるとしても、自分はその途はとらないと言明しているのだ。だがガンスはあえて十字架に這いつくばり、裏切り者となった。ユダヤ教に背いただけではなく、協会の仲間たちを欺いた。ハイネの詩はガンスの改宗を非難し軽蔑する。

けれども、ことはそう単純ではない。「ある背教者に」と題するこの三連詩を作ったハイネ本人が、実はガンスに先立って同年の六月二八日に、ハイリゲンシュタットで改宗していたのである。つまりこの詩はガンス非難の詩であると同時に、ハイネの自己嫌悪の表明でもあった。前にガンスとハイネは双生児だといったが、ここでも二人は相前後して改宗しているのである。ガンス受先の報を受け、やはりモーザーにあててハイネは告白する。「もし信念にもとづいてやっているのなら、彼は馬鹿です。おもねりのつもりでやっているのなら、彼は下司です。それでも僕はガンスを愛することをやめないでしょう」と。⁽²⁸⁾ 背教者ハイネは屈折しながらも、同じ背教者ガンスを精一杯理解しようとしている。

ガンスはユダヤ教からキリスト教へと改宗 (Bekehrung) した。しかしながら、彼における本当の改宗は、サヴィニーの歴史法学からヘーゲルの歴史哲学および法哲学への「転向」(Kehre) ということかたちをとっておこなわれた。

ガンスがティボーのもとで学位を取ったことはすでに述べた。その学位論文たる『ローマ債務法論』は、その標題からしていかにもサヴィニー好みの歴史法学的研究であった。ガンスはベルリンに帰って早速これをサヴィニーに献呈したが、その添え状には「ひとえに閣下の御講義が学問への喜びと愛とを私に吹き込み」と、過度に卑屈な調子でサヴィニーへの感謝がつづられていた。⁽²⁹⁾ところが、サヴィニーはこれを黙殺した。それどころか、教え子のガンスがユダヤ人であるがゆえに、彼のベルリン大学への就職を断固として拒みつけたのであった。例の〈ガンス法〉は国王の勅令ではあるけれど、国王がその裁定を下すにあたっては、サヴィニーの意向が決定的に影響したにちがいない。

ところが、ガンスは第二の著書『世界史的発展における相統法』を、今度はヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) に贈っている。次に示すのは、そのときの添え状である。

「格別に尊敬に値すべき教授殿！

尊敬する教授様、大変遅れながらもようやく完成した相統法に関する拙著第一巻を、私は臆することなしに先生に献呈することはできません。臆しながらというのは、法廷に立ち入る者は、裁判官だけに権限があるとみなすがゆえに、何人といえどもそう感ぜざるをえないからです。先生の哲学を研究したことで、同封の本を仕上げるに際していかなる思想がもたらされたか、私は序文において告白せずにはいられませんでした。先生の御寛容のために必要でしたら、ここには釈明だけを記しておきます。すなわち、私は不本意ながらも感謝と賛美の爆発のゆえに、その表明を公けにせざるをえなかったのです。

ことはひとえに尊敬する先生の御判断にかかっておりますので、献呈したものと同様の仕事についても、ぜひ

とも先生の校閲と激励が示されますように。

最高の尊敬を込めて

貴台の忠実なる下僕

ベルリン、一八二三年十月：日

新フリードリヒ通り五七番地⁽³⁰⁾

エドゥアルト・ガンス博士

ガンスは四年前にはサヴィニーに最初の著書を献呈したが、二冊目の著書はヘーゲルに献呈した。これに関して、ブラウンの評価は「一八一九年のサヴィニーあてのものと細部にいたるまでほとんど同じ添え状を付して」と手厳しい。それは辛辣にすぎるとしても、ガンスがサヴィニーからヘーゲルに乗り換えたのは明らかだ。この転向にくらべれば、キリスト教への改宗など本当はなんでもなかったのかもしれない。そしてヘーゲルは、サヴィニーとは異なってガンスを受け入れた。やはりブラウンによれば、それ以後ヘーゲルとガンスの親しい関係ができあがり、同時代の観察者からガンスはヘーゲルの「ヨハネス」になったと冷やかされたという⁽³¹⁾。

ヨハネスはキリストの最愛の弟子であった。ガンスがヨハネスになぞらえられたということは、ヘーゲルはキリストのごとき存在であったということだ。すでに指摘したように、ハイネはサヴィニーをキリストにたとえたことがある。だがベルリン大学にはもう一人のキリストがいて、それがヘーゲルであったということになるのか。そういえば、ガンスをヘーゲルのヨハネスと冷やかした「同時代の観察者」であるけれども、ここにもハイネの影が見えてはいないだろうか。

それはともかく、一八二二年の《ガンス法》により国王がガンスの任用を拒絶したにもかかわらず、それが逆転して二六年に員外教授への登用が決まったのはなぜなのか。宰相のアルテンシュタインは、もともとガンスに同情

的であった。とすれば、文化大臣アルテンシュタインの強力な巻き返しがあったとみるしかない。そして、アルテンシュタインにガンスを推挙したのは、ヘーゲルであったということになる。ガンスをめぐって、サヴィニーとヘーゲルという二人のキリストが綱引きをし、最終的にはヘーゲルが勝利したという構図である。ベルリン大学を舞台に、哲学部のヘーゲルは息のかかったガンスを法学部に送り込むことに成功した。彼の逆転任用の契機は、サヴィニーからヘーゲルへの転向にあった。キリスト教への改宗は、単なる儀式にすぎなかった。

こうしてガンスは、めでたくもベルリン大学法学部の員外教授となる。しかしそれは、ガンスの任用劇のまだ第一幕にすぎない。第二幕は彼の正教授への昇進をめぐって演じられた。新たな登場人物として皇太子を紹介してこう。この王子はサヴィニーによって帝王学を授けられたこともあって、生涯にわたりサヴィニーとの強い信頼関係を築いていた。皇太子はやがて国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世となり、その青年時代からの言動のゆえに「玉座のロマン派」と呼ばれた。この国王の在世中に三月革命が起こり、そのときの立法大臣がサヴィニーであったのだが、このことはのちに述べる。ここでは彼がまだ皇太子であったとき、ガンス問題にいかに関わったかを記そう。

サヴィニーの薫陶のゆえか、そもそも皇太子はガンスの任用に反対であった。その頑なな態度には国王以上のものがあった。したがって、ガンスの正教授昇進に際し皇太子が妨害することは当然に予想できた。だが今度はアルテンシュタインがガンスのために工作した。アルテンシュタインは、わざわざ皇太子が長期の旅行のため不在となる時機をねらって、昇任案を国王に提示したのである。国王は風向きを察したのか、あっさりこれを承認した。こうして正教授の辞令は、一八二八年の十二月十一日に交付された。辞令を受けたガンスは、喜びのあまり国王の署名にキスしたという⁽³²⁾。

サヴィニーはガンスの正教授就任に抗議して、同月二九日にアルテンシュタインあてに手紙を書き、法学部の学
部行政を今後は拒否すると通告した。また三一日には、ようやく旅行から戻った皇太子にも書状を認めて、ガンス
とは一切の人間関係をもたない決意を伝えた。⁽³³⁾ 皇太子はサヴィニーの訴えに同調し、またアルテンシュタインの処
置に憤激して、同日折り返しサヴィニーに返書を送った。

「ベルリン、一八二八年大晦日

我が敬愛するサヴィニー先生——ちようどお手紙を受け取って読んだところです。先生の信頼に心から感謝し
ております。——私は先生が思われるよりもっと光榮に存じております。——なのになんという知らせを受け
るのでしょうか?!?! 学部はこの鳥を持ち込むことについて、私が今日の夜までわずかな予感さえもたなかっ
たことを御賢察ください!!!! それは本当にとんでもないことです。——私は私たちの法学部における増加と
減少を心から嘆いておりますが、今はただ、白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない、というように了解するばかりで
す。——池がまったく泥水になってしまうことを、神よ防ぎたまえ。——始まってしまいました。——もっとも
私は一連の出来事のあとでも(思うに)こう述べることができます。もし私がここにいたら、始まることはな
かったのにと! というのも、この鳥については、たびたび私に相談があったからです。——今年の始めに私の
もとに一冊の著書が送られてきましたが、それは学部への彼の任用に同意を求めるものでした。——私はあまり
に無礼だと感じました。そうした酔っぱらいの言葉や、著書での前代未聞の解釈の跡のゆえに、私は(いつか尋
ねられたことがあったので)断固とした反対意見が確定的なものであることを知らせることにしたのです。——
先生ならなおさら私の不審を理解されることでしょう——私の憤激を。私の確信するところでは、ガンス教授を

厳肅かつ正式に戒告し、彼の学説を撤回させることは、学部義務ではないでしょうか。さもないければ、学部としては至高の座からのそのような賜物について、苦情を申し立てねばならないでしょう。先生以外の方が読むかもしれませんね。この恥ずべき思想に対しては何かがなされねばなりません。新たな年こそは、尊敬する友人たる先生に神の恵みがありますように。私のために友情を保ってください。そして私たち二人自身のために。

皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルム⁽³⁴⁾

長い引用になってしまったが、これが大晦日に皇太子がサヴィニーにあてて急ぎ書いた手紙の全文である。少しばかり解説を加えておこう。

この手紙で最も有名になったのは、「白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない」(Schwan und Gans können nicht auf demselben Teiche schwimmen.) という名言である。一方の鷺鳥(Gans)がガンスに重なるかぎり、白鳥(Schwan)がサヴィニーを意味することはあらためて指摘するまでもない。ガンスは鷺鳥なる名前をもったユダヤ人であったから、そもそも運命的にからかわれざるをえない。

だが名前の点は別にしても、ガンスはなるほど鷺鳥のように騒々しい性分で、「上司や当局と、編集部や出版社と、反対者や仕事仲間といつも争っている、もめ事の多い人物⁽³⁵⁾」であった。これに反して、サヴィニーは貴族の生まれで、気品と権威を備えた優雅な人格者であった。サヴィニーがキリストにもたとえられたことはすでに紹介したが、彼はそのほかにもゼウスやゲーテになぞらえられている。それはいささか大仰にすぎるとしても、ベルリン大学法学部という澄んだ池を静かに泳ぐ白鳥のごとき存在であったことはたしかだ。白鳥と鷺鳥は姿形が似ていないこともないけれど、しかし優雅な白鳥と喧しい鷺鳥が同じ池で仲良く泳ぐのはむずかしい。皇太子の懸念は、み

ごとに的中したということである。

文中に法学部の「増加と減少」とあるが、これはガンスが加わりサヴィニーが去ったことにほかならない。鷺鳥が正教授となって池を泥水に変えたことに耐えきれず、白鳥は学部から身を退くことを通告した。しよせん「白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない」のである。ガンスの正教授就任は「至高の座からの賜物」であった。つまり、かつて「ガンス法」によって員外教授への任用を拒絶した国王が、今度は正教授の辞令を交付したのであった。皇太子は父国王の措置に対して、不審の念を抱き憤激している。ガンス問題は、王室の内紛にもつながりかねない危険性を孕んでいた。

さて、員外教授としてベルリン大学で講義をもつようになってから、ガンスは公然とサヴィニーを批判するようになった。正教授になると前後してそれはますます執拗なものとなり、サヴィニーは神経衰弱に陥って研究生活を中断するまでにいたった。サヴィニーに教えを受けたブルンチュリは、その間の事情を次のように伝える。

「今も残る講義ノートによれば、ガンスはサヴィニーが隣りの講堂で教えているのに、年間をつうじて講義で彼を批判しつづけたことがわかる。ガンスが『サヴィニーに反対した』ような『向こうみずで仮借のない仕方』は、誰に対しても、たとえアルニムに対してさえも、隠されることはなかった。一八三〇年にアルニムは義兄であるサヴィニーに誕生日の詩を捧げたのだが、このなかではとりわけ次のように歌われている。

なおも盛りの栄冠が、

君を囲んで、

ガンス以外は

皆君を愛す……」⁽³⁶⁾

引用文中に、サヴィニーはロマン派の詩人アヒム・フォン・アルニムの義兄とあるけれども、この関係は少々ややこしい。アルニムの親友で同じくロマン派のクレメンス・ブレンターノには姉と妹がいて、姉のクニグンデはサヴィニー夫人となり、妹のベッティーナはアルニムに嫁いだ。したがって、アルニムからみればサヴィニーは義兄にあたる。

おそらく一八三〇年頃がサヴィニーが精神的に最も落ち込んでいた時期であって、その最大の原因はいうまでもなくガンスとの人間関係であった。もっとも、傷心のサヴィニーのまわりにはアルニムやブレンターノらの詩人たちがおり、また彼の学問上の弟子としてプフタやブルンチュリたちがいた。さらに、詩人と学者の双方の顔をもつ最愛の弟子として、ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟がいた。⁽³⁷⁾ 彼らはこの時期のサヴィニーを様々な仕方で慰め、ガンスの無遠慮な攻撃を批判した。「ガンス以外は皆君を愛す」の詩は、このようにしてサヴィニー派の固い絆を確認したのであった。

反面、ガンスが徹底してサヴィニーの歴史法学を批判できたのは、なんといってもヘーゲルが後ろ盾となっていたからである。ハイデルベルクのティボーもまた、ガンスの後見人であった。ガンスはいわばヘーゲルの哲学とティボーの法学を接ぎ木することによって、サヴィニーの歴史法学に対抗しようとした。

皇太子は「白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない」といったが、鷺鳥のガンスが正教授となり白鳥のサヴィニーが神経衰弱となったことで二人の対立に終止符が打たれたわけではない。白鳥と鷺鳥の対立の本当の意味は、むしろそのあとに露わになったからである。

四 ガンス教授の誕生日

白鳥のサヴィニーと鷺鳥のガンスの対立は、アルニムが傷心のサヴィニーに「ガンス以外は皆君を愛す」の詩を贈った一八三〇年頃が頂点であった。というのも、翌三年にヘーゲルが急死することによって、ガンスは最大の後ろ盾を失うことになったからである。ヘーゲルとガンスの関係についてここでは詳しく述べないが、⁽³⁸⁾「ヘーゲルのヨハネス」とまで呼ばれたガンスは、ヘーゲル法哲学の後継者として自他ともに認める存在になっていた。

もっとも、ヘーゲルの死の直前、実はガンスとの関係は破綻していたとすることもできる。そしてここにも例の皇太子の関与がみられる。この間の事情をブラウンが要領よく紹介している。

「ところが一八三一年の末近くになって、ガンスにきわめて深い衝撃を与えるような事件が生じた。十一月十四日にまったく不意にヘーゲルが死んだのだ。そのほんの少し前、二人のあいだには意見の相違が生じていた。皇太子の忠告によって、ヘーゲルは数年前にガンスに譲った法哲学の講義を再び自身で担当することを告知した。皇太子の推測によれば、ガンスはヘーゲル哲学から『革命的な帰結』を引き出し、学生たちを『共和主義者』にしてしまうからであった。その後もヘーゲルのものとはわずかの聴講者しか登録せず、これに反してガンスのものには例によって非常に多くの聴講者が登録したので、ガンスは公けの揭示でヘーゲルの講義への参加を勧めた。このやり方がヘーゲルを完全に怒らせてしまった。そのあげく、ヘーゲルは当時の噂によれば、私は弟子に庇護されかねないと口走ったそうだが、その効果があったかは今もわからない。ヘーゲルがガンスのやり方を拒

絶したぶっきらぼうな手紙への言及は、どのヘーゲル伝にも見あたらないのだ。たしかにガンスはヘーゲルと死の床で和解したが、しかしヘーゲルはとうてい慰められなかった⁽³⁹⁾。」

ヘーゲルは法哲学の講義をハイデルベルク時代に始め、ベルリン大学でもこれをつづけていた。その講義は「自然法と国家学」という標題でおこなわれていたのだが、その主要な課題は抽象的な自然法が国家によって実定化される論理のおよび歴史的な必然性を叙述することにあつた。サヴィニーの歴史法学も法の歴史と論理を解明するところから出発したはずだが、しだいに歴史よりは論理を重視する方向に傾いていった。サヴィニーの歴史法学は、奇妙なことにその没歴史性のゆえに、ティボーやヘーゲルやガンス、そしてマルクスによって批判されることになる。ヘーゲルの法哲学講義は、実はサヴィニー批判であることによって多くの学生の支持を集めたのであつた。

ヘーゲルの法哲学講義は、一八二〇年の『法の哲学綱要』の刊行後もつづけられた。だがガンスがベルリン大学法学部に任用されたことにもなつて、二七年の冬学期からそれはガンスに譲られることになつた。少なくとも法哲学の領域において、彼はヘーゲルの後継者と目されるようになったのである。

ガンスをヘーゲル法哲学の後継者だといったが、実はこれだけではまだ足りない。というのも、ガンスとヘーゲルの関係を考えるとき、学術批評協会での活動を抜きにするわけにはいかないからだ。学術批評協会（Verein für wissenschaftliche Kritik）は、ヘーゲル派の学術組織として一八二六年にベルリンで発足した。ベルリンには王立のアカデミーがあつたけれども、ここは反ヘーゲル派の神学者シュライエルマッハーと法学者サヴィニーが牛耳つていて、さすがのヘーゲルも会員になることはできなかった⁽⁴⁰⁾。そこで対抗組織として結成されたのが、学術批評協会であつた。もとより同協会の筆頭はヘーゲルであるが、ガンスはこの組織の事務を一手に引き受けることで、

ヘーゲル法哲学のみならず師の哲学全体の束ね役となったのである。

すなわち、ガンスは學術批評協会の事務局長に指名された経緯についてこう証言している。「同協会は哲学・自然科学・歴史文学の三つの部会に分かれ、各部門のそれぞれに事務局員が選ばれる。哲学部会には私が、自然科学部会にはシュルツが、歴史文学部会にはレオが任命された。さらに、私には事務局全体の指導が任せられた。組織の事務局長に指名されたからだだが、これには原稿の整理や財務や大方の通信の世話をする、という義務が課されていた。さらに組織の規約を起草し、これに事務規程を加えることが決められた。この仕事も私に託された。⁽⁴⁾」

協会の事務といえば、ユダヤ人文化学術協会が想起される。第一節に、ガンスとハイネの出会いに関して、ライスナーの言葉を引用しておいた。一八二二年のことであるが、そのなかにガンスがハイネに提案して「ベルリン発の法学・国家学の批評誌」の発行を持ちかける場面が出てくる。これは時期尚早で実現しなかったけれども、ライスナーはこれにつづけて、「しかし四年後にはより成熟したかたちで、コッタ男爵とヘーゲルの積極的な協力のもとにそれは実現した」と記す。これは學術批評協会の機関誌『ベルリン学術批評年報』のことにほかならない。ガンスの側からすれば、ユダヤ人文化学術協会の延長線上に學術批評協会があり、かねて構想した法学・国家学の批評誌の具体的な現われとして『ベルリン学術批評年報』があることになる。想像を逞しくすれば、學術批評協会の結成そのものが、ヘーゲルではなくガンスの主導によるものであった可能性さえある。いずれにせよ、ガンスは二五年にユダヤ人文化学術協会の会長を辞めて、翌二六年に學術批評協会の事務局長となった。

ガンスが共和主義者だったからだろうか、ガンスの法哲学講義は、ヘーゲル自身による法哲学講義よりはるかに学生の人気を集めた。法哲学講義にかぎらず、ガンスの講義には当時としては驚異的な数の学生が登録した。たとえばヘーゲルの死の前後の一八三一／三二年の冬学期には九〇五名、翌三二／三三年の冬学期には八三七名の学生

が登録した。さらに三〇／三一年の冬学期におこなった公開講座には、大学創設者の弟で博物学者のアレクサンダー・フンボルトをも含めて、実に千五百名もの聴講者が殺到したという。⁽⁴²⁾ ガンス自身の魅力とともに、隣国フランスでの七月革命後の共和主義的な雰囲気、ベルリン大学にも押し寄せてきたということであろう。

ガンスの人気を目の当たりにして、ヘーゲルの心中は穏やかでなかったはずだ。皇太子の勧告にしたがって、ヘーゲルは法哲学講義を再開したが、ガンスも従来の法哲学講義を継続しており、この二つが競合することになった。そして多くの学生はガンスのほうに集まったのである。これをみてガンスはヘーゲルの講義を受けるようにと揭示した。ヘーゲルは弟子のこのふるまいを侮辱と感じて激怒した。かつてガンスの不法法はサヴィニーを神経衰弱にしたが、今度はヘーゲルの神経をも逆なでした。ヘーゲルの死因はコレラであるからこのことと直接に関係はないものの、しかし病床のヘーゲルを見舞ったこの出来事が、ヘーゲルにとって大きな心労となったことは確かである。

いわば仕掛け人の皇太子は、かつて「白鳥と鷺鳥は同じ池では泳げない」といった。もちろん白鳥とはサヴィニーのことであって、ヘーゲルに白鳥は似合わないかもしれない。けれどもやはり、ヘーゲルとガンスも同じ池では泳げなかった、ということだろうか。

ガンスは学生たちを共和主義者にする、という皇太子の懸念も的中した。一八三〇年七月革命の熱狂はベルリンをも巻き込んで、学生たちはガンス教授の周りに集まった。時代は確実にガンスのものになった。

次に紹介するのは一八三八年の三月、ガンス教授の誕生日に起きた興味深い事件である。

「三月二日は誰からも愛されたガンス教授の誕生日であった。一八三八年には六百名の学生が、先生に夕べの

音楽を捧げるべく集まった。もっともその本来の目的は、ゲッティンゲンの七教授に敬意を払うことであった。

——警察は公道での公然たる行進や音楽に許可を与えなかったので、セレナーデは教授邸〔ガンスはシャルロツテン通り三六番地に住んでいた〕の中庭で演奏されるしかなかった。しかも家の扉は開かれていた。こうして中庭ばかりか玄関や道路までもが、セレナーデを聴こうとする人々でいっぱいになった。——セレナーデがゲッティンゲンの教授たちへのデモンストレーションとして利用されるであろうことは誰もが知っていたので、積極的な参加がなされたのである。近衛連隊の音楽が演奏された。学生たちはガンス教授のために雷のような万歳を唱えた。ガンスが彼らに礼を述べたので、本来セレナーデは終わるはずであった。ところがその代わりに、学生たちはゲッティンゲンの七教授のために二度目の万歳を捧げたので、その間、近衛連隊の音楽は通常のファンファーレで調子を合わせるはめになった。⁽⁴³⁾」

アルニムはサヴィニーの誕生日に「ガンス以外は皆君を愛す」の歌を贈ったが、ガンスもまた誰からも愛されて、その誕生日には六百名もの学生が家に押しかけるほどであった。この六百名のデモ隊の中には、若きカール・マルクスもいたはずである。⁽⁴⁴⁾マルクスは一八三六／七年の冬学期からベルリン大学の法学部に在籍しており、サヴィニーとガンスの講義を受講した。ガンスはマルクスに「きわめて勤勉」との評価を与えた。マルクスはガンスをつうじてヘーゲルの法哲学を学び、ガンスに影響されてサヴィニーの歴史法学を批判した。マルクスにハイネを紹介したのもガンスであったかもしれない。

マルクスが紛れ込んでいたからいいうのではないが、ガンス邸での騒動は誕生祝いかこつけた政治的集いであった。先の引用文にもあるように、この集まりにはゲッティンゲンの七教授との連帯の意味が込められていたからで

ある。ゲッティンゲンの七教授事件とは、前年の一八三七年にハノーファー王国のゲッティンゲン大学で起きた、憲法擁護と大学の自治をめぐる反政府運動であった。自由主義的な憲法を新王が破棄しようとしたところ、これに七名の大学教授が抗議したことが事件の発端であった。彼らは国王によって免職され王国から追放された。このことがウィーン体制下の閉塞的な政治状況の打破につながっていく。すなわち、四六年のゲルマニステン大会や、四八年の三月革命およびフランクフルト国民議会へとつながっていくのである。こうしてゲッティンゲンの七教授事件は、三月前期の自由主義的な国民運動の発端となった。

ところで、ゲッティンゲンの七教授の中心にはグリム兄弟がいた。とくに兄のヤーコプ・グリムは、七教授事件以来、三月前期の運動の渦中でつねに象徴的な存在として英雄視されていた。⁽⁴⁴⁾グリムは歴史学者や言語学者として名高いが、彼はサヴィニーの一番弟子で、歴史法学派の最大の逸材であった。グリムの法学は、法を歴史や言語と一体のものとして捉えるもので、この意味では師のサヴィニー以上に、本来の意味での「歴史法学」であったといえる。

ベルリンのガンス邸でのセレナーデやファンファーレや雷のような万歳は、実はガンスとグリムに向けられたもので、彼ら兩人の連帯に対する学生たちの期待を表明したものでなかったろうか。ヘーゲルとサヴィニーは犬猿の仲であったけれども、彼らの弟子たちのあいだには様々な交流があり、それは当時の学生のみならず知識階層によっても支持されていた。ガンスは学術批評協会の結成にあたってグリムを勧誘したこともあるし、七教授支援のためにドイツ各地にゲッティンゲン協会が作られたとき、ベルリン支部の責任者となったのもガンスであった。⁽⁴⁵⁾サヴィニーの天敵であったガンスは、一方でグリム支援に奔走していた。学生たちはこのことを知っていたからこそ、ガンス教授の誕生日にグリム支持の示威行動をおこなったのだ。

ところが、誕生日の騒動から一年あまりのちの一八三九年五月五日、ガンスは卒中のために急死してしまう。四二歳であった。ガンスはグリムとも同じ池で泳ぐことができなかった。ユダヤ人仲間のファルンハーゲン⁽⁴⁷⁾は、ガンスの葬儀について日記にこう記している。

「一八三九年五月八日、水曜日

ガンス教授の葬儀。シュライエルマッハーの葬式以来、これほど厳粛で大がかりで長大なものではなかった。遺体は担がれて進んだ。教授全員、八百名ほどの学生、あらゆる階層からの多数の人々、百台以上の馬車がつづいた。音楽、聖歌隊。墓ではマールハイネケが弔辞を述べたが、とても評判が良かった。私は歩いて墓地まで行っただので、弔辞を聞くことができなかった。私は昨日からすごく悲しんでいる。クライン博士が隣にきて、私を最後まで案内してくれた。――」⁽⁴⁸⁾

マールハイネケの弔辞には、「彼は総じて、付き合いくいが、真理を純化し、自由を愛する、そうした人であった」との一節がある。⁽⁴⁷⁾ガンスはあちこちでぶつかって多くの敵を作ったが、しかし多くの人に愛された。ガンスの誕生日も賑やかであったけれど、彼の葬儀の盛大さもそのことをよく証明している。

ブラウンによれば、ファルンハーゲンの日記には一個所だけ間違いがある。それは「教授全員」が葬儀に参加したという部分だ。実際には、ベルリン大学からたった一人だけ葬式に出なかった教授がいる。サヴィニー⁽⁴⁸⁾である。ただし、彼はその日の講義を休講にした。休講の理由は、「葬儀がおこなわれるため」であった。鷺鳥のガンスは死んだ。白鳥のサヴィニーは、ついに葬列には加わらなかった。

白鳥と鷺鳥の物語は、これでお終いである。でも、もう少しだけ付け加えておこう。

一八四八年にベルリンでも三月革命が勃発した。革命のこちら側にはグリムがおり、向こう側にはかつての皇太子で今や国王となったフリードリヒ・ヴィルヘルム四世と、そのもとで立法改訂大臣となっていたサヴィニーがいた。もちろん、ガンスはすでにいないけれども、これに関してライスナーは述べている。もしもフランクフルトのパウロ教会で開かれた国民議会の日までガンスが生きていたとしたら、彼はダールマンやゲルヴィーヌスやグリムらの中央党と思想を共有したことだろうと。⁽⁴⁹⁾ この三人はゲッティンゲンの七教授の中心であったが、ガンスが早くから彼らとの連帯を模索していたことはすでに述べたとおりである。仮りにグリムの歴史法学とガンスの法哲学が結びついたとしたら、三月革命やフランクフルト憲法の様相も大きく変わっていたかもしれない。

さらにもう一つ。ガンスの弟子としてはマルクスが有名だが、明治憲法の制定に影響を与えたルドルフ・フォン・グナイストも、ある意味でガンスの弟子であった。ある意味でというのは、グナイストはベルリン大学でガンスから学位を得たのだが、⁽⁵⁰⁾ サヴィニーの講座を引き継いで教職に就いたからである。グナイストはユダヤ人のアルベルト・モッセを可愛がって日本に派遣したけれども、グナイストがガンスの弟子であったことと、案外どこかで関係しているのかもしれない。ガンス教授の誕生日に、マルクスとグナイストが肩を並べて騒いでいたとすれば、それはそれで大いに想像力をくすぐる光景ではある。

注

- (1) Hans Günther Reissner, *Edvard Gans, Ein Leben im Vormärz*, Tübingen, 1965, S.63f. H・キルヒャー『ハイネとユダヤ主義』小川真一訳、みすず書房、一九八二年、四七頁以下。木庭宏『ハイネとユダヤの問題——実証主義的研究——』松籟社、一九八一年、二四頁。同『ハイネの見た夢』日本放送出版協会、一九九四年、一七六頁以下参照。

- (2) Reissner, a. a. O., S. 64f. ユダヤ人文化学術協会の会員のうち「レオポルト・ツントツについては、マックス・I・ディエント『ユダヤ人——神と歴史のはざままで——』下、藤本和子訳、朝日選書、一九八四年、一四二頁以下参照。
- (3) Reissner, a. a. O., S. 69, 74, S. 78f. 『ユダヤ学雑誌』掲載のガンス論文は次のとおり。「ユダヤ人のイングランド移住」一号、一八二二年。「ローマにおけるユダヤ人関連立法——ローマ法源による——」一号、二号、一八二二年。「モーゼ＝タルムード相統法の基礎」三号、一八二三年。「ポーランドにおける『カハル』の廃止」三号、一八二三年。『ユダヤ学雑誌』について、ハインはそので使用されたドイツ語の難解さを皮肉っている。Heine an Leopold Zunz vom 27. 6. 1823 in: Heinrich Heine, Werke und Briefe, hrsg. v. Hans Kaufmann, Bd. 8, Berlin, 1961, S. 102.
- (4) Reissner, a. a. o., S. 79, 80.
- (5) William Davis Robinson, Memoir adressed to Persons of the Jewish Religion in Europe, on the subject of emigration to, and settlement in, one of the most eligible parts of the United States of North America, London, 1819, S. 25. vgl., Reissner, a. a. O., S. 99.
- (6) Reissner, a. a. O., S. 86ff. 議事録によれば、十名の会議出席者のうち、アメリカ入植計画に積極的に賛成したのは、キルシュバウム、ヴォールヴィル、コーヘン（ハンブルク）、シェーンバルク、マルクスの五名、情報の収集を先行さすべきとしたのが、ガンス、ツントツ、モーザーの三名、積極的に反対したのは、ノルマン、アウエルバッハの二名であった。他に、キルヒヤー、前掲書、五一頁参照。
- (7) ガンスは十九世紀初頭のアメリカ合衆国をヨーロッパの中世的伝統と比較して次のように評価している。だがこのことと、合衆国のなかにユダヤ人コロニーを建設することとは別問題であったようだ。
「この国家においては、中世的国家の全体が覆されている。領主など、もはや存在しない。ヨーロッパにみられる中世的伝統も、そこにはまったく存在しない。ヨーロッパにおいては、心情や習俗や伝統のうちに君主制の思想が根づいている。それは北アメリカのように概念から生まれた国家がヨーロッパにも誕生し、そのような伝統が死滅するまでは、なお世紀の（？）へびとだろ。」Eduard Gans, Naturrecht und Universalrechtsgeschichte, hrsg. v. Manfred Riedel, Stuttgart, 1981, S. 100. vgl., Manfred Riedel, Hegel und Gans, in: Natur und Geschichte, Karl Löwith zum 70. Geburtstag, Stuttgart usw., 1967, S. 263.

- (8) Reissner, a. a. O., S. 93f. vgl. Heines briefliche Bericht an Ernst Christian August Keller vom 1. 9. 1822, in: Heine, Werke und Briefe, Bd. 8, S. 49f.
- (9) ハイネによるガンス批判につき、堅田『歴史法学研究——歴史と法と言語のトリアデー——』日本評論社、一九九二年、第六章「ガンス」あるいは法の普遍性」一五一頁以下参照。
- (10) Heine an Moses Moser vom Mai 1823, in: Heine, Werke und Briefe, Bd. 8, S. 84, vgl. Reissner, a. a. O., S. 96, 100. 同書九六頁と九七頁のあいだに、この書簡のファクシミリが挿入されている。
- (11) Reissner, a. a. O., S. 98. 同書の Mordecai とは、ハイネが Mardochai と記している。
- (12) ebd., S. 102.
- (13) ヘルマン・クレンナーは、ヴィルヘルム・フォンホルトの概念とは異なっており、この勅令がユダヤ人に完全な法的平等を認めただけではなっていない。だがこのような評価は、フォンホルトに甘すぎた勅令と評する。Hermann Klenner, Humboldts Staat als Rechtsinstitut des Menschen, in: Wilhelm von Humboldt, Menschenbildung und Staatsverfassung, Texte zur Rechtsphilosophie, Freiburg u. Berlin, 1994, S. 334. 以下勅令の原文とドイツ語を、vgl. Emantipations-Edikt, in: Dokumente zur deutschen Verfassungsgeschichte, Bd. 1, hrsg. v. Ernst Rudolf Huber, 3. Aufl., Stuttgart, 1978, S. 49ff.
- (14) Johann Braun, Judentum, Jurisprudenz und Philosophie, Bilder aus Leben des Juristen Eduard Gans (1797–1839), Baden–Baden, 1997, S. 50, 46. vgl. Norbert Waszek, Freiheit und Verfassung, Von Hegel zu Gans, in: Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie, Bd. 78, 1992, S. 463.
- (15) Braun, a. a. O., S. 55. vgl. Max Lenz, Geschichte der Königlichen Friedrich–Wilhelms–Universität zu Berlin, Bd. 4, Halle a. d. S., 1910, S. 448.
- (16) Braun, a. a. O., S. 77. vgl. Monica Richarz, Der Eintritt der Juden in die akademischen Berufe, Tübingen, 1974, S. 99.
- (17) 堅田『前掲書』一五二頁以下。vgl. Braun, a. a. O., S. 77f.
- (18) Friedrich Carl von Savigny, Zeitschrift für geschichtliche Rechtswissenschaft, Bd. 3, Heft 1, 1816, S. S. 22ff. 以下

- ニー「新法典賛成論と反対論」同『法典論争』大串兎代夫訳、世界文学社、一九四九年、二〇八頁以下。サヴィニーのユ
ダヤ人論は、歴史法学の綱領と深く結びついていたところでも展開をなしている。
- (61) Juristische Fakultät an Altenstein vom 4. 4. 1820. in: Lenz, a. a. O., Bd. 4, S. 448f. vgl., Braun, a. a. O., S. 56.
- (20) Gans an Altenstein vom 3. 5. 1821. in: Lenz, a. a. O., Bd. 4, S. 452f. トンマンは著書のなかでガンス覚書の全文を紹介
している。 Braun, a. a. O., S. 58ff.
- (21) Braun, a. a. O., S. 70.
- (22) Waszek, Eduard Gans, die "Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik", und die französische Publizistik der Zeit, in:
Die "Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik", Hegels Berliner Gegenakademie, hrsg. v. Christoph Janme,
Stuttgart—Bad Canstatt, 1994, S. 96. vgl., Reissner, a. a. O., S. 91f.
- (23) Heine an Immanuel Wohlwill vom 1. 4. 1823. in: Heine, Werke und Briefe, Bd. 8, S. 65f. vgl., Braun, a. a. O., S.
70.
- (24) Heine, Briefe aus Berlin, Zweiter Brief, in: Heine, Werke und Briefe, Bd. 3, 1961, S. 510. 堅田「前掲書」第七章「ハイ
ネ、あつちの法廷ホウムの戯」一八三頁。
- (25) Heine, Briefe aus Berlin, Zweiter Brief, S. 528.
- (26) Braun, a. a. O., S. 71, 81. vgl., Reissner, a. a. O., S. 113, 117.
- (27) zit., Horst Schröder, Zum Gedenken an Eduard Gans, in: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt—Universität zu
Berlin, Jg. 13, Heft 4, 1964, S. 518. vgl., Wilhelm Dilthey, Heinrich Heine, in: Gesammelte Schriften, Bd. 15, Stuttgart,
S. 215f. キムチャー「前掲書」一一一頁以下参照。
- (28) Heine an Moser vom 14. 2. 1825. in: Heine, Werke und Briefe, Bd. 8, S. 219. 木塚『ハイネとナチスの問題』一三三頁以下
参照。
- (29) 堅田「前掲書」一五三頁。zit., Braun, a. a. O., S. 77f.
- (30) Gans an Hegel vom 10. 1823. in: Briefe von und an Hegel, 3. Aufl., hrsg. v. Johannes Hoffmeister, Bd. 3, Hamburg,
1969, S. 32f.

- (31) Braun, a. a. o., S. 80.
- (32) Lenz, a. a. O., Bd. 2, 1. Hälfte, Halle, 1910, S. 391.; Carl Ludwig Michelet, Wahrheit aus meinem Leben, Berlin, 1884, S. 513. vgl., Braun, a. a. O., S. 82.
- (33) Savigny an Altenstein vom 29. 12. 1828, in: Lenz, a. a. O., Bd. 4, S. 514f.; Savigny an den Kronprinzen vom 31. 12. 1828, in: Adolf Stoll, Friedrich Karl v. Savigny, Ein Bild seines Lebens mit einer Sammlung seiner Briefe, Bd. 2, Berlin, 1929, S. 404f. vgl., Braun, a. a. O., S. 84.
- (34) Kronprinz an Savigny vom Sylvester 1828, in: Stoll, a. a. O., Bd. 3, 1939, S. 281. vgl., Hans-Joachim Schoeps, Um die Berufung von Eduard Gans, in: Zeitschrift für Religions- und Geistes Geschichte, Bd. 14, Heft 3, 1962, S. 280.
- (35) Braun, a. a. O., S. 51.
- (36) Johann Casper Bluntschli, Denkwürdiges aus meinem Leben, Bd. 1, Nördlingen, 1884, S. 65.; Stoll, a. a. O., Bd. 2, S. 366. vgl., Braun, a. a. O., S. 85.
- (37) サヴィニーとグリム兄弟'とくにヤーコプ・グリムとの思想的関係につき' 堅田『法の詩学——グリムの世界——』新曜社'一九八五年'第二章「歴史法学のイロニー——サヴィニーとグリム——」六五頁以下参照。
- (38) 堅田「エドゥアルト・ガンスにおける法哲学と法史学」『比較法史研究』二号'一九九三年'四一四頁以下参照。
- (39) Braun, a. a. O., S. 85f., 185f. vgl., Arnold Ruge, Aus früherer Zeit, Bd. 4, Berlin, 1867, S. 432.; Hegel an Gans vom 12. 11. 1831, in: Hoffmeister (hrsg.), a. a. O., Bd. 3, S. 355f.
- (40) 学術批評協会設立後もヘーゲルはアカデミー会員に執着したようで'一八三〇年の会員選挙に立候補している。反ヘーゲル派は対抗馬として'サヴィニーの愛弟子ヤーコプ・グリムとヘーゲルのかつての親友シェリングを立てた。結果はいずれも必要得票を獲得できず、ヘーゲルはついに会員になれなかった。ヘーゲルの急死の前年のことである。堅田「ある選挙結果」『現代思想』一四巻八号'一九八六年'二五四頁参照。
- (41) Gans, Die Stiftung der Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik, in: ders., Rückblicke auf Personen und Zustände, Neudruck, hrsg.-v. Norbert Waszek, Stuttgart—Bad Canstatt, 1995, S. 234. vgl., Waszek, Eduard Gans (1797—1839): Hegelianer—Jude—Europäer, Texte und Dokumente, Frankfurt am Main usw., 1991, S. 115f.

- (42) 堅田「エドゥアルト・ガンスにおける法哲学と法史学」四二四頁以下。Reissner, a. a. O., S. 132. vgl. Waszek, Eduard Gans (1797-1839), S. 164.
- (43) Seep Miller u. Bruno Sawadzki, Karl Marx in Berlin, Beiträge zur Biographie von Karl Marx, Berlin, 1956, S. 84f. vgl. Heinrich von Treitschke, Deutsche Geschichte im Neunzehnten Jahrhundert, 4. Teil, 6. Aufl., Königstein/Ts., Düsseldorf, 1981, S. 542f.; Lenz, a. a. O., Bd. 2, 1. Hälfte, S. 497.; Reissner, a. a. O., S. 157.
ミラー／ザヴァツキーの引用文中には、ガンスの誕生日は三月二二日とあるが、トライチュケは翌二三日としている。実は生年も含めてガンスの誕生日は厳密には確定できない。この点でもガンスはハインネと非常によく似ている。
- (44) 堅田「ヤーコプ・グリムとゲッティンゲンの七教授事件」『獨協大学法学部創設二十五周年記念論文集』第一法規、一九九二年、九頁以下参照。
- (45) Treitschke, a. a. O., 4. Teil, S. 663. vgl. Reissner, a. a. O., S. 156. 七教授支援の募金活動にガンスが奔走している様子をみて、大臣フォン・ロヒツウは「抜け目のなうガンスめ」と悔しがった。Karl August Varnhagen von Ense, Tageblätter (12. 1. 1838), in: Werke, Bd. 5, hrsg. v. Konrad Felchenfeldt, Frankfurt am Main, 1994, S. 261. vgl. Waszek, Freiheit und Verfassung, S. 465, Anm. 20.; ders., Eduard Gans, S. 100, Anm 23.
- (46) Varnhagen, Tagebücher (8. 5. 1839) Bd. 1, Leipzig, 1861, S. 128. vgl. Schröder, a. a. O., S. 515. マックス・フォン・ベーン『ボーダーマイヤー時代——ドイツ十九世紀前半の文化と社会——』三修社、一九九三年、一〇五頁参照。
- (47) vgl. Schröder, a. a. O., S. 522.
- (48) Braun, a. a. O., S. 89.
- (49) Reissner, a. a. O., S. 139.
- (50) ガンスとゲナイストの関わりにつき、上山安敏『憲法社会史』一九七七年、日本評論社、四六頁参照。vgl. Erich J. Hahn, Rudolf von Gneist 1816-1895, Ein politischer Jurist in der Bismarckzeit, Frankfurt am Main, 1995, S. 3, 45.